# 西九州大学短期大学部との連携講座の効果について
## ～福祉用具のより専門性の高い知識・技術の習得～

# About the effect of the collaborative course with Nishikyushu University Junior College
## ～ Acquisition of more specialized knowledge and skills for assistive devices ～

鶴　和也、尾村　恵子

**要旨：**

昨年度より西九州大学短期大学部との連携講座を実施している。今年度は長崎短期大学の介護福祉コース１年生･2 年生を対象に、西九州大学短期大学部の鶴和也助教より福祉用具についての講義を実施していただいた。鶴助教は、介護福祉士の資格と作業療法士の資格を取得されており、福祉用具についてより専門性の高い講義を学生たちは受講することができた。講座では、普段の学生たちとは違う雰囲気や、短時間で少しでも多くの知識・技術を身につけようと努力する姿をみることができた。

近年、高齢社会の中、介護ニーズが増え、高齢者にとっても、介護を行う介護者にとってもより安全で安楽な介助方法が求められ、ノーリフトポリシーが提唱されている。その方法の一つとして福祉用具の活用が挙げられ、長く介護福祉士として携わるためにも福祉用具の活用がこれからの介護者にとって必要となることが考えられる。本講座では、学生たちが卒業し、就職した際に健康な身体で介護にいつまでも携わることのできる手段を習得するためにもとても貴重な体験であったのではないかと実感した。本稿では、講座の内容とアンケート調査の結果を報告する。

Abstract :

In recent years, as the needs for care increase in an aging society, there is a demand for safer and easier methods of care for both the elderly and the caregivers who provide care, and a no-lift policy has been advocated. One of these methods is the use of welfare equipment, and it is thought that the use of welfare equipment will be necessary for caregivers in the future in order to remain involved as caregivers for a long time. We felt that this course was a very valuable experience for the students to acquire the means to be able to engage in caregiving with a healthy body for a long time after graduation and employment. This paper reports on the content of the course and the results of the questionnaire survey.

**キーワード：**介護　専門性　安全　安楽　福祉用具

**Keywords :** Care　Expertise　Safety and comfort　Welfare equipment

## Ⅰ　目的

長崎短期大学と西九州大学短期大学部は、連携協定に基づき、長崎短期大学地域共生学科介護福祉コースと西九州大学短期大学部地域生活支援学科介護福祉コースの教員派遣を通して介護福祉教育の質を高めている。本稿は講座の内容と効果を報告する。

## Ⅱ　方法

西九州大学短期大学部地域生活支援学科介護福祉コースの鶴和也助教に本学 1 年生と 2 年生を対象とした生活支援技術に関する講義 1 コマ（ZOOM にて実施）と演習 2 コマ（対面にて実施）を実施していただき、演

習終了後に学生へのアンケート調査を実施した。

Ⅲ　講座の実施状況

１）授業開始前の準備

本講座は、西九州大学短期大学部と長崎短期大学の包括的連携に基づく連携講座である。長崎短期大学との連携講座は、令和２年度に第一弾として、長崎短期大学の日本語教育を専門とする教員による介護福祉士国家試験の日本語対策講座を行った。本講座は、連携講座の第二弾としての取り組みである。

本講座の講師は、西九州大学短期大学 地域生活支援学科 介護福祉コースの鶴助教（以下 講師）がつとめた。講師は、介護福祉士と作業療法士の資格を有しており、両資格の視点を活かした内容の講座の依頼を受けて講座を開催する運びとなった。

講座を始めるに当たり、長崎短期大学 地域共生学科 介護福祉コースの尾村助教・藤島教授と講座の日時や講座の内容、受講学生の学習の進捗状況についてメールまたはＺＯＯＭ会議にて確認・調整を行った。

話し合いの結果、対象は長崎短期大学地域共生学科 介護福祉コースの１・２年生で、講座内容は、福祉用具についての講義と、ノーリフトケアの実技とした。

２）講義の内容

①福祉用具についての講義

介護保険法で福祉用具は、「要介護者等の日常生活の便宜を図るための用具及び要介護者等の機能訓練のための用具であって、利用者がその居宅において自立した日常生活を営むことができるよう助けるもの」[1)]とされている。前述のとおり、自立支援の視点を重要視しており、自立支援の実現を目指す介護福祉士にとって、福祉用具の知識・技術を身につける意義は大きい。

福祉用具の講義については、１年生は令和３年６月15日（１コマ90分）、２年生は令和３年９月22日（１コマ90分）の日程で実施した。新型コロナウイルスの感染防止を考慮し、実施方法はＺＯＯＭでの遠隔授業とした。講座開始前の長崎短期大学の教員（以下　長崎短大教員）との話し合いの中で、福祉用具の講義は１・２年ともに未実施とのことであったため、講義内容は福祉用具についての概要や種類、制度、アセスメント等幅広い内容とした。また、ＩＣＴを活用した福祉用具の説明や実際の福祉用具の活用場面について動画を用いて説明し、より学生が興味を抱きやすいように講義内容の工夫を行った。

②ノーリフトケア実技

令和２年度の介護労働実態調査によると[2)]、「労働条件・仕事の負担に関する悩み等」の項目において、人手不足、低賃金についで、身体的負担が大きい（腰痛や体力に不安がある）が多い結果となった。腰痛を原因として離職する介護職員も多く、国もノーリフトケアを推奨しており、腰痛を防止し、長く介護の仕事を続けていけるようにするためにも、ノーリフトケアの技術を身につける意義は大きい。

ノーリフトケアの実技については、受講学生も少人数（各回９名づつ）であることから、感染対策を徹底し、長崎短期大学の介護実習室にて対面で行った。１年生は令和３年７月20日（２コマ 各90分）、２年生は令和３年９月29日（２コマ 各90分）の日程で実施した。 １年生については、新型コロナウイルスの影響で、講義と実技の期間があいてしまった。

今回の実技では、介護現場でも使用される頻度が高い、スライディンググローブ、スライディングシート、スライディングボード、リフトを中心に実技の授業を実施した。スムーズに実技を進められるように、使用物品や実技環境については、事前に長崎短大教員と話し合い、実技前に準備をしていただいた。受講学生へ細かい指導を行えるように、長崎短期大学で実技を担当している教員にも補助で入っていただき、講師と長崎短大教員の２人体制で授業をおこなった。

１年生の実技では、ＺＯＯＭでの講義からの時間があいてしまったため、講義の振り返りとノーリフトケア

で使用する物品の説明を座学で行い、実技へと進めた。

１年生は、長崎短期大学の授業の中でスライディングシートやスライディングボード等の講義は受けたことがあるとのことであったため、理解度を確認しながら実技を行った。

実技のはじめに、講師が用具の使用方法や手順、身体の動かし方、注意点（リスク管理など）など手本を見せながら説明を行った。

学生はペア（介助者役と対象者役）になり、講師の手本を手がかりに実技を行ってもらい、繰り返し実技を行ってもらいながら講師が各ベッドを回り個別に指導を行った。１年生は、実習が本格的に始まる前の段階であり、施設実習でのノーリフトケアの実践も未経験であり、手順は理解しているが、身体の動かし方（ボディーメカニクスや重心移動など）がぎこちない場面も多くみられた。そのため、指導方法も学生の動きを補助しながら身体の使い方を理解できるように努めた。個別指導を行いながら、講師の気づきや学生の質問等、全体で共有したほうがいいと判断したことについては、実技の手を一旦止めてもらい、全体で共有する時間とした。

１年生の実技では、新型コロナウイルスの影響で、講義からの期間があいたため、実技に入る前に、座学で前回のふりかえりを行った。そのため実技後半には、やや時間が足りなくなってしまい、説明が駆け足となってしまった。

２年生の実技では、１年生の実技での反省点を活かし、はじめの講義の振り返り等の座学の時間は省き、はじめから実技中心の授業とした。

２年生は施設実習で実際にノーリフトケアを経験した学生も多く、１年生と比べ、実技もスムーズで、実際に施設で使ってみての具体的な疑問などもみられた。

また、講師の手本を見てからの実技の上達度も高く、積極的にペアを交代して実施したり、上達度の高い学生が上達度の低い学生に教えたりする場面がみられた。そのため、講師の積極的な指導の時間は減らし、学生がお互いに学び合えるように工夫した。

２年生の実技は、１年生の実技の反省点を活かし、時間配分を工夫したことで、後半も駆け足となることもなく、実技の時間を十分に確保することが出来た。

## Ⅳ　アンケート調査の結果

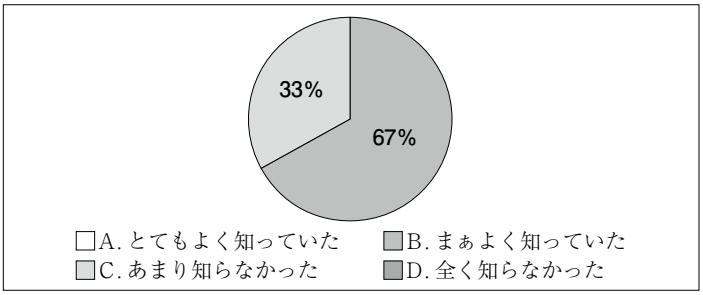
### １）１年生に対する調査　令和３年６月15日・７月20日（火）実施

Ｑ１．講義を受ける前に福祉用具があることを知っていましたか？

表１

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもよく知っていた | 0 |
| Ｂ．まぁよく知っていた | 6 |
| Ｃ．あまり知らなかった | 3 |
| Ｄ．全く知らなかった | 0 |

図１



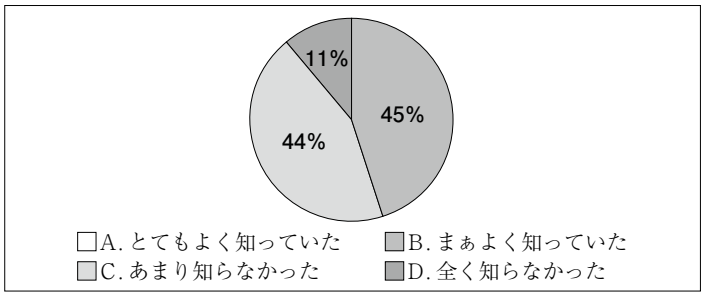

福祉用具というものがあることを９名中６名の学生が知っていると回答していたが、1年生ということもあり、９名中３名の学生が知らないと回答した。全体の３分の１の学生が福祉用具の存在をしらないという状況であった。

Q２．福祉用具の使用方法について知っていましたか？

表２

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| A．とてもよく知っていた | 0 |
| B．まぁよく知っていた | 4 |
| C．あまり知らなかった | 4 |
| D．全く知らなかった | 1 |

図２



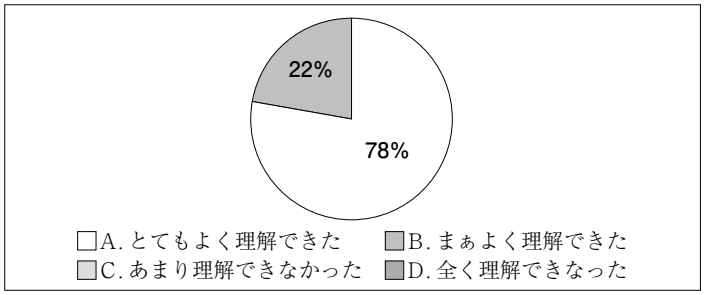

福祉用具の使用方法については、知っていると答えた学生が９名中４名。知らないと答えた学生が９名中５名おり、全く知らないと回答している学生が１名という状況であった。

Q３．福祉用具の講義を受けて、福祉用具の役割を理解できましたか？

表３

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| A．とてもよく理解できた | 7 |
| B．まぁよく理解できた | 2 |
| C．あまり理解できなかった | 0 |
| D．全く理解できなった | 0 |

図３



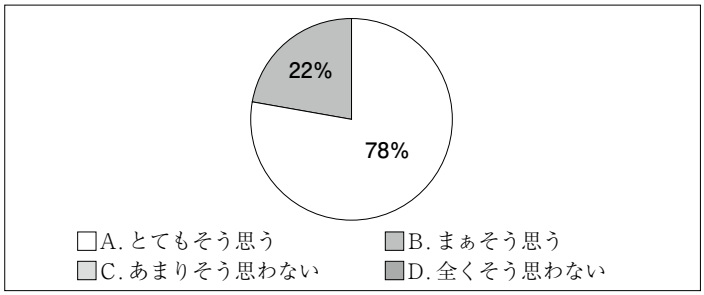

講義を受講してから福祉用具の役割を理解できたと９名中９名の学生が回答しており、とてもよく理解でいたと９名中７名の学生が回答していた。

Q４．福祉用具のことについてもっと知識を深めたいと思いますか？

表４

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| A．とてもそう思う | 7 |
| B．まぁそう思う | 2 |
| C．あまりそう思わない | 0 |
| D．全くそう思わない | 0 |

図４



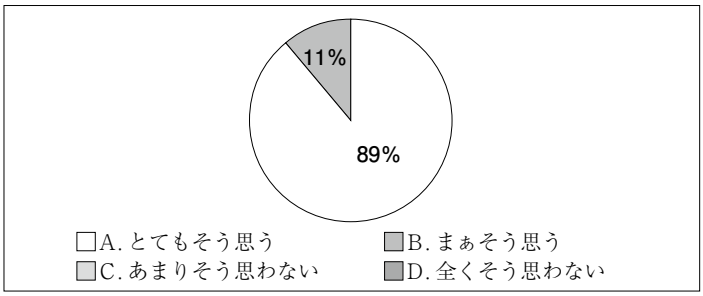

講義を受講し、福祉用具への知識を深めたいと９名中９名全員が答え、９名中７名は知識を深めたいととてもそう思うと答えた。

Ｑ５．今後介護を行う上で福祉用具を活用していきたいと思いますか？

表５

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもそう思う | 8 |
| Ｂ．まぁそう思う | 1 |
| Ｃ．あまりそう思わない | 0 |
| Ｄ．全くそう思わない | 0 |

図５




講義を受講し、福祉用具の活用をしていきたいと答えた学生が９名中９名で、９名中８名の学生が活用したいととても思うと回答していた。

講義についての感想

○見たことのない福祉用具があり、実際に体験して安全に使うことが大切だと学んだ

○福祉用具を使用することで、移動の際にかかる力が少なくなり、楽になった

○重心の大切さを知った

○腰に負担のかからない方法を実践できてよかった

○事故予防にもつながることがわかった

○介助者だけでなく、利用者さんの視点で介助を行うことがとても重要なことだと改めて思った
　今後も利用者さんの立場になって考えられるようになりたい

○ボディメカニクスがわかった

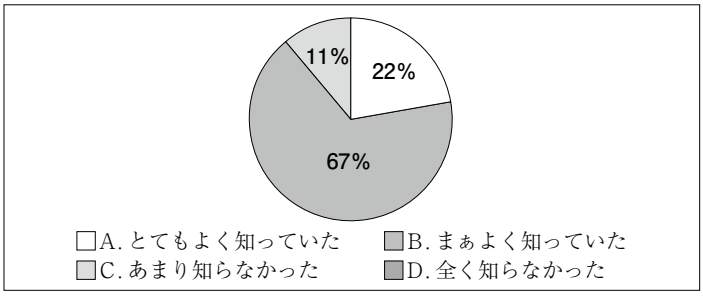
2）２年生に対する調査　令和３年９月22日・９月29日に実施

Ｑ１．講義を受ける前に福祉用具があることを知っていましたか？

表６

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもよく知っていた | 2 |
| Ｂ．まぁよく知っていた | 6 |
| Ｃ．あまり知らなかった | 1 |
| Ｄ．全く知らなかった | 0 |

図６



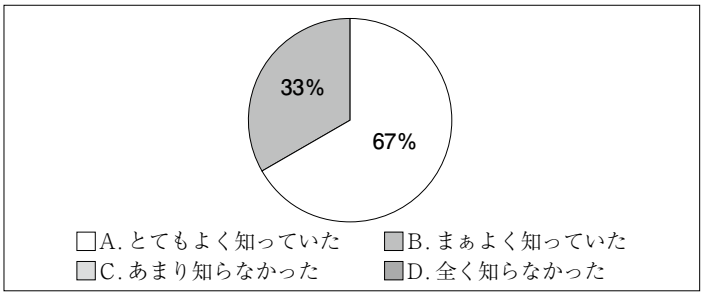

福祉用具というものがあることを９名中８名の学生が知っていると回答していたが、９名中１名の学生が知らないと回答した。

Ｑ２．福祉用具の使用方法について知っていましたか？

表７

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもよく知っていた | 6 |
| Ｂ．まぁよく知っていた | 3 |
| Ｃ．あまり知らなかった | 0 |
| Ｄ．全く知らなかった | 0 |

図７



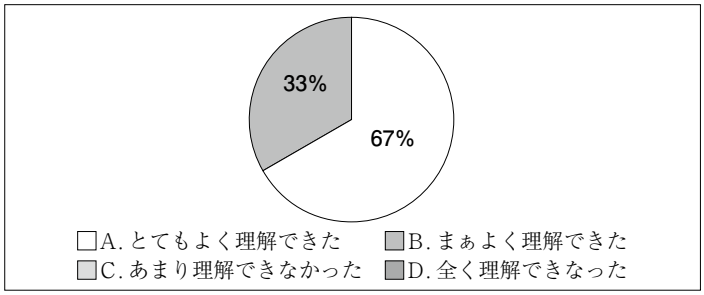
福祉用具の使用方法については９名中９名が知っていると回答。２年生は全ての実習を終えており、福祉用具を実習施設で使用したことのある学生がほとんどであったため、ほとんどの学生が使用方法を知っていると回答していた。

Ｑ３．福祉用具の講義を受けて、福祉用具の役割を理解できましたか？

表８

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもよく理解できた | 6 |
| Ｂ．まぁよく理解できた | 3 |
| Ｃ．あまり理解できなかった | 0 |
| Ｄ．全く理解できなった | 0 |

図８



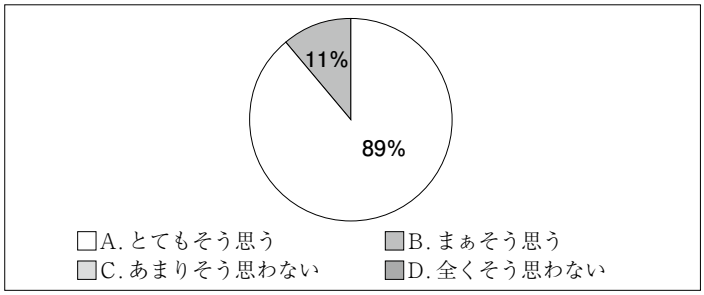

受講後に福祉用具の役割を理解できたと回答した学生が９名中９名、とてもよく理解できたと回答した学生が９名中６名であった。

Ｑ４．福祉用具のことについてもっと知識を深めたいと思いますか？

表９

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもそう思う | 8 |
| Ｂ．まぁそう思う | 1 |
| Ｃ．あまりそう思わない | 0 |
| Ｄ．全くそう思わない | 0 |

図９



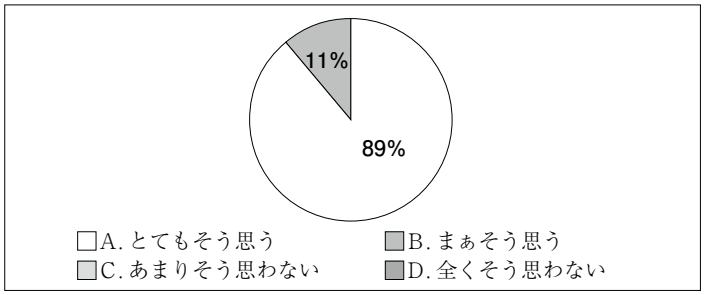

受講後に福祉用具についてもっと知識を深めたいと回答した学生は９名中９名で、とてもそう思うと回答した学生は９名中８名であった。

Ｑ５．今後介護を行う上で福祉用具を活用していきたいと思いますか？

表10

| 回答 | 人数 |
|---|---|
| Ａ．とてもそう思う | 8 |
| Ｂ．まぁそう思う | 1 |
| Ｃ．あまりそう思わない | 0 |
| Ｄ．全くそう思わない | 0 |

図10




受講後福祉用具の活用をしていきたいと思うと答えた学生が９名中９名、とてもそう思うと答えた学生は９名中８名であった。

Ｑ６．福祉用具をどのような場面で活用しようと思いますか？

・利用者の体への負担を少なくする必要がある場面

・介助を行う際に、自分の身体を痛めないためや、利用者の方の社会参加のため活躍の幅を広げるために活用したい

・移乗の場面に活用したい
・残存機能を活かせる場面、移乗・移動の場面で活用したい
・利用者様の苦痛軽減の場面で活用したい
・利用者様の障害などに合わせ、安全に介助を行う場面で活用したい
・入浴介助の場面
・リハビリの場面

Ｑ７．今回の講義についての感想
・実習の際はほぼ人力の介助であったため、たくさんの施設で導入されたらよいなと思った
・何回も繰り返しすることができ、福祉用具以外でも細かい動作について助言をしてもらえたのですごく良い時間になった
・実習で何度か触れたことがあるぐらいの感覚でしかなかったが、今回より詳しく実際に使用したことで、今までより深く理解することができた
・実習前に学びたかった
・わかりやすくて丁寧なご指導を頂き楽しかった。１つでもケアの技術をできるようになった事が楽しかった
・仕事に就いた時に実践したい。新しい技術を習得できた
・福祉用具を使用することが実習で少なかったり、福祉用具がなかったりしたので、使用方法を正しく理解できていなかったので、理解できてよかった
・自分が体験することで、「される側」の気持ちの理解につながった。まだまだ福祉用具について知りたい
・自分ができていないところの理解を深めることができた

Ｖ-1　考察・まとめ（文責：鶴）

本講座は、西九州大学短期大学部と長崎短期大学の包括的連携に基づく連携講座である。長崎短期大学との連携講座は、令和２年度におこなった長崎短期大学の日本語教育を専門とする教員による介護福祉士国家試験の日本語対策講座につづいて、第二弾の連携講座として実施した。

本講座では、ＺＯＯＭでの講義（１コマ 90 分）と実技（２コマ 各 90 分）をセットとし、各学年で実施した。ＺＯＯＭの講義では、福祉用具全体を理解できるように、福祉用具の歴史や種類、制度や実際の活用場面など幅広い内容とした。実技では、ノーリフトケアを中心とした内容とした。

講座前には、長崎短大教員とメールまたはＺＯＯＭにて授業の進捗度、学生の様子等の情報を共有できたことは授業を計画するうえでとても役に立った。

ＺＯＯＭ等のビデオ通話機能を使った講義では、対面での実施に比べ、学生の反応等がややつかみにくいが、新型コロナウイルス感染症や時間等の制約を受けることなく実施できるため、有益なツールであると感じた。実技に関しては、もともと講義の翌週に予定していた１年生の実技の日程が新型コロナウイルスの影響で、２回ほど変更になるトラブルがあったが、長崎短大教員と密に連絡をとり、柔軟に講義日程を調整していただいたことで無事に実施できた。

介護福祉士養成施設の教員は、さまざまな資格や経験を有している。本講座では、介護福祉士と作業療法士の資格を有する教員が講師を務め、両資格の視点を活かし指導することをこころがけた。ＺＯＯＭでの講義は、実技で行うノーリフトケアに特化した内容に絞ってもよかったのではないか？などの反省点もあったが、講座後のアンケートでは、「とてもよく理解できた」「もっと知りたいと思った」等の前向きな意見が多かったことから福祉用具やノーリフトケアの理解促進や技術向上に一定の効果があったと考える。

本講座は、西九州短期大学部と長崎短期大学の包括的連携に基づく連携講座である。多様な経験を有する様々な教員から学べる連携講座は、学生にとっても有益な機会となるのではないかと考える。また、他校学生への講義や学生からの質問、講座前や講座後のメールやＺＯＯＭ会議で、両校の教員同士で意見交換できる機会は、

教員にとっても大変有益な時間であった。

現在は、新型コロナウイルスの影響もあり、学生の交流や体験を通した学びが制限されている状況である。

連携講座、第一弾の介護福祉士国家試験日本語対策講座、第二弾の本講座を通し、改めて交流や体験の大切さ、ＺＯＯＭ等の遠隔授業ツールの有用性を感じた。

両校が連携を深め、遠隔授業ツール等を効果的に使用し、学生が多様な学びを得られるように模索していきたい。今後も、両校の連携講座がさらに飛躍していくことを期待する。

Ｖ -2　考察・まとめ（文責：尾村）

今回の連携講座では、１年生は実習が本格的に始まる前の段階で実施し、２年生は全ての実習が終了した段階で実施した。移動・移乗に関しての授業は１年生・２年生ともに終了しており、福祉用具の活用についてはまだ終了していない状況であった。それぞれの授業でアンケートを行い、集計した結果をみると、「まだまだ福祉用具について知りたい」「実習で何度か触れたことがあるぐらいの感覚でしかなかったが、今回より詳しく実際に使用したことで、今までより深く理解することができた」など１年生・２年生ともに共通して、この講座を受けて福祉用具に関する知識・理解や興味・関心が深まったと全員の学生が回答していた。

また、実際に福祉用具を活用し、「自分が体験することで、『される側』の気持ちの理解につながった。まだまだ福祉用具について知りたい」「介助者だけでなく、利用者さんの視点で介助を行うことがとても重要なことだと改めて思った。今後も利用者さんの立場になって考えられるようになりたい」など、介護者の立場・利用者の立場で経験することで、それぞれの立場での考え方・気持ちを理解することができていることが分かった。福祉用具を活用することで、自分の身体だけでなく、利用者の安全も守ることができることが理解できたのではないだろうか。

身体の使い方についても専門的な視点からの講座を受けることで、より安全に、楽に移乗を行うことができていた。学生自身、そのことを実感することができており、アンケートでも「移動の際にかかる力が少なくなり、楽になった」「腰に負担のかからない方法を実践できてよかった」「事故予防にもつながることがわかった」などの回答がみられた。このような機会を設けることにより、学生たちの福祉用具に関する興味・関心や意欲の向上につながることがわかった。これからも継続して実施することができれば、これからの学生たちの質の向上にもつながっていくのではないかと考えられる。

少子化による労働人口の減少で介護業界の人材不足は年々深刻化している。そのような中で、いかに質の良い介護が提供できるのかが重要であることから、介護福祉士養成校の責任は大きいと考えられる。他大学と連携し、より専門性の高い介護福祉教育につながったのではないかと思う。

今後の課題として、今回、２年生は実習が終了した後にこの講座を受講したため、実習前に受講したかったとの意見が聞かれた。福祉用具に関しては実技がほとんど実施できておらず、実習に行って学ばせて頂くような形となってしまったため、今年度の１年生のように実習が本格的に開始する夏休み前までに福祉用具の講座の実施を検討したい。

引用文献

中央労働災害防止協会

１）厚生労働省：福祉用具：＜オンライン＞
https://www. mhlw.go.jp/content/12300000/000314951. pdf（2021 年 12 月 29 日閲覧）

２）令和２年度介護労働実態調査＜オンライン＞
http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2021r01_chousa_kekka_gaiyou_0823. pdf（2021 年 12 月 29 日閲覧）

Central Industrial Accident Prevention Association

１）Ministry of Health, Labour and Welfare: Welfare Equipment: <Online >

https://www. mhlw.go.jp/content/12300000/000314951. pdf（viewed December 29, 2021）
２）FY2020 Nursing Care Labor Survey <Online>（Japanese only）
http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2021r01_chousa_kekka_gaiyou_0823. pdf（viewed December 29, 2021）

参考文献

１）一般社団法人日本ノーリフト協会　https://www. nolift. jp/nolift/nolift-care　（2021 年 10 月 7 日閲覧）
２）厚生労働省（2014）「介護福祉士養成教育の直面する課題」（2021 年 10 月 7 日閲覧）
３）厚生労働省（2010）「介護業務で働く人のための 腰痛予防のポイントとエクササイズ（2021 年 10 月 7 日閲覧）
１）Japan No Lift Association https://www.nolift.jp/nolift/nolift-care（viewed October 7, 2021）
２）Ministry of Health, Labour and Welfare（2014）"Challenges Facing Care Worker Training Education"（viewed October 7, 2021）
３）Ministry of Health, Labour and Welfare（2010）"Points and Exercises to Prevent Low Back Pain for People Working in Nursing Care Services（viewed October 7, 2021）

連携講座の様子①

連携講座の様子②